

四象八牛

徳欽をゆく

2002年8月、2003年1月 雲南省迪慶藏族自治州徳欽県



四川省から雲南省へ

四川省甘孜州郷城県から、雲南省迪慶州香格里拉県（旧中甸県）へ向かう。8月、この辺りはまだ雨期だ。旅の途中、知り合った武漢の旅行者から「雲南へ行く道は、土砂崩れで通行止めだ。仕方ないから康定へ戻るよ」と聞かされていた。「まあ、とにかく行ってみるよ」と郷城まで来たのだった。どうやら通行止めは解除されているらしい。雲南へ抜けられるようだ。

朝早くバスターミナルへ行って、香格里拉行きのバスが来ていないか確認する。チケットも買ったかったのだが、売り場には人影がない。仕方ないので出直すことにした。お昼過ぎに、もう一度行って見たが、売り場は開いていないので、バスターミナルの宿舎の方へ行く。やっと職員を見つけて聞いてみると、「もう売り切れだよ」と、あっけなく終わってしまった。このままではここで足止めになってしまう。困ったなあ。宿へすげすごと引き返した。

夕方、諦めきれずにもう一度バスターミナルへ。売り場の窓が開いている。ダメで元々だ、もう一度「中甸へ行きたいんだけど」と言ってみた。そうすると、なんと窓口のおばちゃんが「誰にも言っていないけど、座席が一つ空いているのよ。売ってあげるけど、誰にも言っちゃダメよ。みんなに恨まれちゃうから」と、チケットを書いてくれた。ラッキー！

次の日の朝7時過ぎ、このバスに乗って雲南へ向けて出発。中国人の背包族も多い。街外れでまた数人乗り込んできた。チケットを買えなかった人たちだ。彼らはバスの床に座り込む。途中、この辺りでよく採れる松茸を積み込む。また泥濘にはまったトラックがあつて立ち往生したりもした。天気が悪く景色も見られない。なんとか四川と雲南の境にある標高4,326m、大雪山の峠を超え、香格里拉へ到着。約二百kmの道のりに10時間半もかかってしまった。

香格里拉、シャングリラ？

香格里拉、2001年末に旧県名の中甸から変更された。英国の小説家、ジェームス・ヒルトンの「失われた地平線」に描かれた桃源郷、シャングリラ。その地はここだと四川省と争って、県名まで変えてしまった。しかし、「中甸」という名前の方がいいと感じるのは、私だけなのだろうか。

1日間、街をウロウロと回ってみる。整然とした街並みで、面白くない。「シャングリラと名乗る街はどんなところだろう」と、過剰な期待をしていたためか、肩透かしを喰らった感じだ。どうも5月、花の咲き乱れる頃、郊外へ行くといいらしい。8月は雨期、空には厚い雲が広がるばかり。しばらく考え込む。「そうだ、徳欽へ行ってみよう」。

徳欽へ～第一次 2002年8月～

相変わらず天気が悪い。標高が高いので、雨が降るとやっぱり寒い。バスターミナルで出発を待つ。待合室を行ったり来たりしていると、



▲ 山間の小さな街、徳欽昇平鎮

日本人らしき人を見かける。「どこへ行くんだろう」と、思っていると、同じ徳欽行きのバスに乗り込んできた。私の旅行中は、滅多に日本人と出会うことがない。座席も離れているのでしばらく話しかけずにいた。

さて、出発の時間だ。バスは古く、ちょっとガタがきている。運転手はごつい顔をした藏民のおっちゃんだ。バスは街を外れ、ナパ海まで来た。そこから坂道を登り出す。するとすぐに渋滞で進めなくなってしまった。原因は、そう崖崩れだ。ショベルカーなどで土砂を取り除いている。終わるまでは通られない。

4時間半かかって、奔子欄という小さな街へ着いた。ここで昼食を摂る。そこからの道がまた酷い。工事中で泥だらけ、雨が降っているのでぬかるみとなって、トラックがはまって立ち往生。崖から崩れた岩が道を塞ぐ。バスの乗客が総出で、岩を取り除く。渋滞がある度に、外へ出て、様子を見ながら、まだかまだかと気が落ち着かない。その間に2人の日本人とも話すきっかけができた。OくんとNさん。2人も私と同じく、徳欽へ行こうと思ったらしい。

辺りが暗くなってきた。香格里拉を出て、もう11時間が過ぎた。バスの乗客みなが疲れてイライラしている。「もうすぐ着くぞ」と、運転手が言う。「やっとか」。しかし、徳欽への道のりはまだまだ大変だったのだ。街の手前で崖が崩れ、通行止め。バスは街の3kmほど手前で停まった。そこからは3人、徒歩で街へ向う。雨が降って寒い。荷物も重い。3人で安宿を探した。3人部屋で一人20元。その後、一緒に夕飯を食べ、ホッと一息。疲れた。...



▲ NさんとOくん、四象八牛

梅里雪山を見たい

さて、徳欽まで来たからには、藏民から神と崇められる梅里雪山の姿を拝みたい。Nさんも見に行きたいらしいが、あいにくのこの天気。2人でどうするか話すが、行っても見られないだろうとの結論だった。しかし諦めきれない私は、それを承知で行ってみることにした。街から、梅里雪山を望むことができる飛来寺までは約10km。西藏自治区へ続く道を行けばよい。時間もあるので歩いて行くことにした。



▲ 霧の中のチオルテン

山肌を削って造られた道を歩いていく。そんなにアップ・ダウンも酷くないので、ゆっくり行けば割と歩きやすい。でも雨なので泥だらけだ。霧がかかって視界も悪い。「ああ、これだとダメだろうな」。心にそう思いながら進んでゆく。道端の路標を確認しながら1km、1kmと歩いてゆく。1時間半ほど歩いたのだろうか。小さな村の中に入った。すると小さなチベット寺院もみえる。飛来寺だ。ここからもう1kmほど行くとチオルテンが並んだ場所がある。そこから美しい梅里雪山が見えるはずなのだが。

チオルテンが並ぶ場所へ到着。やはり霧がかかって真っ白だ。どこを見渡せど、雪山なんて見えっこない。「やっぱりか」。覚悟はしていたが、やっぱりがっかりしてしまった。雲の間を探し、のぞき込むと、山裾に小さな村が見える。あれが明永村らしい。トボトボと徳欽の街へ歩いて引き返す。部屋に戻ると、OくんとNさんがいた。「やっぱりダメだったよ」と、言うだけが精一杯だった。

悔しい気持ち

宿の広間にゲスト・ブックが置いてある。それを手にとって読むと、「梅里雪山を見ることができた。とても美しかった」などと書かれている。時期はほとんどが冬。やっぱり乾期である1月だと、梅里雪山の姿を拝むことができるようだ。「よし、今度は冬に来て、絶対に梅里雪山を見るぞ」と、心に決めた。OくんとNさんにも宣言した。

さて、次の日に香格里拉へ戻ることにした。朝、バスに乗って出発する。この日も雨だ。街を出ると、すぐに渋滞。道が崩れた場所がまた通られなくなっていたのだ。昼まで待ったが、回復せず。徳欽でもう一泊することになってしまった。もう散々だ。

次の日、なんとか香格里拉へ戻る。この後、Oくんは四川省へ、Nさんは大理へ向かうらしい。私は麗江へ...

徳欽へ～第二次 2003年1月～

前回の悔しい思いを胸に、再びやってきました、迪慶州。香格里拉も徳欽も標高3,000m以上にある街なので、冬はとても寒い。日が暮れるとすぐに零下10度ほどになる。今回は寝袋も持参して、意気揚々とやってきたのだ。

香格里拉から徳欽へはバス。前回、11時間半かかったのが、たったの6時間半。というのも道路の舗装工事が終わったことと、乾期で雨が降っていないことが、大きな理由だろう。



▲ 飞来寺

さあ、梅里雪山へ

朝、目が覚める。寝袋の中からゴソゴソと抜け出すと、さっそく天候を確認する。「やった、雲一つない快晴だ」。近くでパンと飲み物を買って、さっそく出発する。前回と同じく、徒歩で梅里雪山を望める場所まで行くことにした。寒いけど天気がいいので、太陽の光を浴びながら進む。とっても気持ちいい。

曲がりくねった道を、5kmほど歩いたのだろうか。尾根を曲がったとたん、目の前に白く輝く雪山が。その美しさにみとれ、声を失った。



▲ 梅里雪山が見えてきた

雪山に向かって、さらに歩き続ける。やはり美しい景色が見えると、歩くのもまったく気にならない。まもなく飞来寺へ到着。せっかくなので堂内へ入って、お祈りをし、ローソクを灯した。



▲ 梅里雪山とチョルテン



▲ 梅里雪山全景

さあ、後1 kmほど歩けば、梅里雪山の全景を望める。ワクワクしながら一步一步進んでいった。尾根を曲がると目の前には、…。雄大な姿の雪山の景色が広がる。美しい。しばらく座り景色を眺め続けた。お昼を過ぎたころから、山の上にうっすらと雲がかかりはじめた。そろそろ街へ戻ろう。

苦勞と満足、徳欽旅行

街へ戻ると、道端にバスが停まっていた。午後3時に、明永村まで行くバスだった。せつかなので、さっそく宿に戻り、荷物をまとめてバスに乗り込む。明永の手前でキャタピラが外れたショベルカーが道をふさぐ。「ああ、また歩きか」と思っていると、トラクターが迎えに来た。明永では民宿に2泊した。暖房もないので寝袋が役に立つ。他に客はいないので、一人で山を登り氷河を眺めに行った。

徳欽へ帰るとき、バスが来ない。仕方ないので、また歩く。途中、トラックの荷台にも乗せてもらい、なんとか飛来寺まで戻った。そこか



▲ 明永氷河

らバスに乗ることができ、街へ戻ることができた。なんとも苦勞が多かった徳欽旅行。しかし梅里雪山の美しい姿を望めただけで、苦勞もすべて吹き飛んだ。またいつか訪れたい場所だ。再見！